北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

「鼠」に関することわざ：「鼠」をどう捉えてきたか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬場, 俊臣 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007571

『札幌国語研究』第 26 号　北海道教育大学国語国文学会・札幌（2021 年）

「鼠」に関することわざ
――「鼠」をどう捉えてきたか――

馬　場　俊　臣

１　はじめに

「ことわざ」は、古くから言い伝えられてきた、教訓・風刺・真理などを含んだ短い言葉であり、様々な事物に対する人々の見方や捉え方が反映されている。

馬場（2010）～（2021）では、「牛」「虎」「兎」「龍」「蛇」「馬」「羊」「猿」「鶏」「犬」「猪、豚」に関する日本のことわざを取り上げ、ことわざに反映されたそれぞれの動物に対する人々の捉え方の特徴を見た。本稿では、「鼠」に関することわざを取り上げ「鼠」に対するどのような捉え方が表されているかを示したい。

本稿で取り上げることわざは、『故事俗信ことわざ大辞典　第二版』（北村(編)2012）に基づいている。同書「付録　全文データ収録 CD-ROM」の「見出しキーワード」検索によれば、「鼠」をキーワードとすることわざは 134 句（俗信・俗説、言葉遊び・しゃれ、慣用句、故事を含む）ある。「馬」305 句、「犬、狗」267 句、「牛」222 句、「蛇、くちなわ」183 句に次いで多い。「鼠」134 句の後は、「猿」117 句、「虎」110 句が続いている。

「鼠」[1]は齧歯目に属しており、この齧歯目は哺乳類中最大のグループで、哺乳類の種の約３分の１[2]が含まれ、繁殖力が強く個体数も多く、南極大陸を除く全世界に分布している。鼠は、齧歯目の中のネズミ亜目に含まれる。ネズミ亜目はさらに、ネズミ上科、ヤマネ上科、トビネズミ上科に大別される。日本に生息するエゾヤチネズミ、ミカドネズミ、ヤチネズミ、スミスネズミ、ハタネズミなどはネズミ上科の中のキヌゲネズミ科に属している。また、イエネズミ（家鼠）類[3]のドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミ、また、日本に生息するアカネズミ、ヒメネズミ、カヤネズミ、アマミトゲネズミ、ケナガネズミなどはネズミ上科の中のネズミ科に属している。このキヌゲネズミ科とネズミ科は、ネズミ亜目の中でもっとも繁栄しているグループである。特に、家鼠類のドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミは、人間の移動に伴ってほぼ全世界に広く分布している。鼠は、農産物の食害や牧草地の被害などのほかに、家鼠類による家屋や電線などの破壊、貯蔵食糧の食害も大きい。また、鼠は、ペストなどさまざまな疾病の媒介者として人間に害

[1] 本段落中の出典の記載がない内容は、『日本大百科全書（ニッポニカ）』（「ネズミ」の項目）に基づく。
[2] 「ネズミ類として知られるネズミ科（Muridae）とキヌゲネズミ科（Cricetidae）はそれぞれ 150 属 730 種、130 属 681 種が含まれ、２つの科をあわせると 280 属 1411 種となる。これは齧歯目 481 属 2277 種の 62％の種、哺乳類全体 1229 属 5416 種の 26％の種」（本川 2016：1-2）である。
[3] 家鼠は、人家やその周辺に棲息するネズミ類の総称である。家鼠以外は、野鼠と呼ばれる。

を与えている[4]。一方、ドブネズミを飼いならしたラット、ハツカネズミを飼いならしたマウスなどは、医学や薬学などの分野の実験動物として役立っている。また、鼠の毛は蒔絵師が使う筆に使われ、毛皮は防寒用の衣類にも利用されるなどしている。

なお、鼠が日本に入ってきた時期に関しては、「これらがいつ渡来したかは定かではないが、もっとも古いのはハツカネズミと考えられている。弥生期に間接的に生息したことが伺えることから、わが国に人が住み着いたころに渡ってきたと想像されている。次に渡来したのはクマネズミで、七世紀にはすでにいたとみられる。今日もっとも勢力をのばしているドブネズミの渡来は、かなり遅く江戸時代初期というのが通説になっている。」（石島 2006：13-14）とのことである。ただし、「家ネズミの渡来時期とルート、および人為的な移入なのか自然分布なのかといった点はネズミ研究者の間で議論の的とされてきた。」（西岡 2016：59）とのことである

さて、「鼠」に関することわざは、「窮鼠猫を嚙む（弱い者や身分の低い者でも絶体絶命の立場に追いつめられると、強い者に反撃を加えること。また、必死の覚悟を決めれば、弱い者でも強い者を苦しめること。）」「驥をして鼠を捕らしむ（人の使い道を誤って、有能な人間をつまらない任務に従事させる。）」「之を用いれば則ち虎となり、用いざれば則ち鼠となる（人は重要な地位を与えられれば、虎のような勢いを得て活躍するが、任用されないと鼠のようにこそこそと逃げて隠れる。）」「鼠壁を忘る、壁鼠を忘れず（害を加えたほうはそのことを忘れているが、加えられたほうはいつまでも忘れない。）」「鼠は社によりて貴し（卑小な鼠も、住み付いた社殿のおかげで敬われる。）」「鼠を以て璞となす（表面上の名や世間での評価を信じて、実際の内容や実力を買いかぶったり見誤ったりする。）」「猛虎鼠となる（君主もひとたびその権勢を奪われると無力となる。）」など中国の故事などに基づく成語も広く知られている。また、「大山鳴動して鼠一匹（前ぶれの騒ぎばかり大きくて、実際の結果はきわめて小さく、取るに足らないこと。）」「手袋をした猫は鼠を取らぬ（気取っていては仕事にならない。）」などのように西洋のことわざに由来するものもある。本稿では、日本のことわざを対象とするため、中国の故事成語などに基づくことわざは取り上げない。本稿では、「鼠」に関する日本のことわざ[5]を見ていく。

以下、鼠に関することわざにおいて注目された鼠の特徴を分類し、ことわざを例示していく。なお、ことわざの後の（）内に示した解釈は『故事俗信ことわざ大辞典　第二版』（北村（編）2012）に基づいている。関連する情報も随時補う。関連する情報は、人間のもっとも身近にいる家鼠（ドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミ）を主に取り上げる。

なお、ドブネズミは「主に下水、台所の流し、ゴミ捨て場、地下街、食品倉庫など、水の十分

[4] ただし、「ペスト菌を媒介した本当の犯人」は「クセノプシッラ・ケオフィスと呼ばれる鼠の蚤で、この蚤がペスト菌をもっていて、人や鼠の血を吸う際に咬傷からペスト菌を相手の血液中に注入する。そのために発病するのだが、この蚤は人や鼠の仲間を共通の宿主とするという厄介な性質をもっている。」（戸川 1991：165）ということであり、「カミュの『ペスト』を見ると、ペストが人間社会で大流行する前にクマネズミや他の鼠たちが大量死したことが書かれている。とするとクマネズミたちも人間同様被害者のわけだが、人間に近づくという癖をクマネズミがもっていたために、クマネズミがペスト媒介の張本人のように思われたのだ。」（戸川 1991：165-166）とのことである。

[5] 『故事俗信ことわざ大辞典　第二版』（北村（編）2012）に漢籍類及び西洋での出典が示されていない表現を日本のことわざとみなす（俗信・俗説等も除く）。

に摂取できる比較的湿った場所を好む。地面に穴が掘れる場合はその中で生活することもあり、水田などにもすむ。」（金子 1994：105）、クマネズミは「ビルや天井裏など比較的乾燥した高所に生活し、高さと幅が 10cm 位の空間が好まれる傾向がある。敏捷で登攀力に優れ高層ビルにも出現する。」（同：106）、ハツカネズミは「家屋、水田、畑、積み藁、土手、草地、河川敷、荒地、および砂丘地などに生息する。原野では穴居生活をする。」（同：108）とのことである。また、「日本の建物にはドブネズミとクマネズミがよくいる。木造で隙間だらけ、台所が湿っぽい家が多かった半世紀ほど以前にはドブネズミが多かったが、鉄筋コンクリートの家やビルが増えるとクマネズミのほうが優勢になったという。」（高槻 2018：91）とのことである。

２　鼠に関する日本のことわざ

（１）全体的特徴

（ア）卑小・弱小・無能

①内弁慶の外鼠（家の中では威張るが外に出るといくじがないこと。）

②死にたる人は生ける鼠に及かず（人はいったん死んだら、生きた鼠ほどの値打ちもない。）

③ただの鼠でない（普通の鼠ではない。油断がならない。）

④鼠も小六十（小柄で風采の上がらない者でも、年をとって経験を積めば、それ相応の働きをすること。）

⑤鼠に黄金、馬の眼に銭（どんなに貴重なものでも、その価値が分からない者にとっては何の意味もないこと。）

⑥虎と鼠（隔たりが甚だしいこと。）

⑦虎狼は防ぎ易く鼠は防ぎ難し（大事に対しては慎重に扱うので失敗もしないが、小事に対しては侮って却って失敗する。）

⑧時に遇えば鼠も虎になる（よい時機に巡り合うと、つまらない者でも出世して権勢をふるうようになる。）

⑨死せる虎は生ける鼠に及ばず／死虎は鼠生に如かず（いくら強くても死んでしまった虎は生きた鼠に及ばない。どんなに強そうな者も死んで動かなくなれば恐くない。）

⑩鼠も虎の如し（勝ちに乗じて進むときは、弱小な者にも勢いがある。鼠も命がけで飛び出す時の勢いは虎のようにすさまじい。）

鼠を、小さくて弱いもの、価値のないもの、取るに足らないもの、無能なものに喩えることわざは多い。さらに、その対極の性質を持つ「虎」と対比して取り上げることわざも多い。

家鼠の大きさに関しては、ドブネズミは「頭胴長 186～260㎜、尾長 149～220㎜、後足長 34～46㎜」「体重は一般に 150g 以上、まれに 500g を超す」（矢部 1996：100）、クマネズミは「頭胴長 146～197㎜、尾長 150～235㎜、後足長 28～40㎜、耳長 17～27㎜」「体重は 200g 以下」（同前）、ハツカネズミは「頭胴長 58～92㎜、尾長 48～74㎜、後足長 14～17㎜、耳長 10～13㎜」「体重は 12～20g 程度」（同前）とのことである。

鼠の弱さ（強さ）に関しては、「ドブネズミは獰猛で、人間の乳幼児を襲うこともある。（中略）

生け捕りされたばかりのドブネズミに刺激を与えると、激しく鳴いて、攻撃姿勢をとることからも獰猛さが感じ取れる。（中略）これと違って、クマネズミはおとなしいし、体もドブネズミより小さい。人間を襲うことなどありえない。生け捕りされたばかりのクマネズミを脅しても、籠のすみに縮こまるが、決して鳴いたり攻撃姿勢をとったりしない。」（矢部 1998：9-10）とのことである。

鼠は小さく弱いが、多産によって種を守っている。「多産戦略は、まずは確実な子孫の維持を可能にする近道であると、理解していただきたい。（中略）ネズミはそもそも、強大な捕食者に有効に渡り合える格闘家ではないのである。」「できるだけ世代を速く回転させ、できるだけ多くの子を産む。子は当然たくさん死ぬ。また個体の寿命は決して長くない。しかし、ポピュレーション（ネズミの「人口」）は、多産と成熟の速さによって維持される。」（遠藤 2000：109）とのことである。

鼠の繁殖や寿命に関しては、ドブネズミは「１年中繁殖するが、春秋にピーク。妊娠期間 21～24 日。平均産子数８～９子。８～12 週で性成熟。」「寿命　野外で１～２年。飼育下で３年。」（矢部 1996：100）、クマネズミは「繁殖習性はドブネズミに同じ。平均産子数５～７子。生後 20 日ほどで離乳し、12～16 週で性成熟。」「寿命　野外で１～２年。」（同前）、ハツカネズミは「野外のものは春と秋に明瞭な繁殖期をもつが、人間生活に依存するものは１年中繁殖する。妊娠期間約 21 日、平均産子数 4～7 子。生後 20 日ほどで離乳し、８～12 週で性成熟する。」「寿命　野外で最長１年半、平均 100 日。」（同前）とのことである。なお、ハツカネズミは「妊娠期間がちょうど二〇日であるところからきている」（佐草 1995：161）とのことである。

なお、鼠の繁殖の速さを連想させる「鼠算」は、江戸時代の数学者・吉田光由が寛永四年（一六二七）に著した『塵劫記』の中で、鼠を材料にして複利計算の例として示したものであり（長谷川 1996：160）、その原文は「第五　ねずみざんの事　　正月に、ねずみちゝはゝいでて、子を十二ひきうむ。おやともに十四ひきになる。此ねずみ二月には、子も又子を十二疋づゝうむゆへに、おやとも九十八ひきに成。かくのごとくに、月に一度づゝ、おやも子も、又まごもひこも、月＼／に十二ひきづゝうむ時に、十二月にはなに程に成ぞ。　　年中の分、合（あはせて）二百七十六億八千二百五十七万四千四百二疋也。」（吉田（著）、大矢（校注）1977：201）[6]である。しかし、「実際には、一月に生まれたネズミが、二月にすぐ子を生むということは起こり得ない。だから現実の世界では、いくらネズミの生殖能力が絶大であっても、こんな無茶な数字になることは無い。試しに多少ネズミの実態を考慮し、生まれたネズミの全部が生き残ったと仮定して計算して見ると、私の答えは一一五四匹となった。これでも、本当には起こることは無いはずの数字である。」（長谷川 1996：161）とのことである。ただし、「ネズミの繁殖力を試すためのある研究報告によると、飼育環境下にある一つがいのハタネズミのペアを追跡調査してみたところ、このペアは一年間に一七回も出産して、平均五匹、合計八五匹もの子供を産んだと言います。さらに驚くべきことに、その八五匹の子供たちも繁殖を繰り返し、何と一年間で二匹のハタネズミが二二〇五匹にまで増

[6] 底本は「寛永二十年版」の『新編塵劫記』（同書「凡例」参照）。

えたと言いますから、まさにネズミ算の典型的なパターンを見るような気がします。」（佐草 1995：161）とのことである。

ちなみに、鼠の能力に関しては、嗅覚や聴覚は、「この小さな生き物は、人がもたない鋭い嗅覚と聴覚をもっている。出会ったものはなんでもにおいをかいで把握し、言葉のかわりににおいによって情報を伝え合う。また、人の可聴域（二〇ヘルツ～二〇キロヘルツ）を超える一〇〇キロヘルツという超高周波の音声で、複雑なコミュニケーションができ、子ねずみは、捕食動物に聞き取れない超音波の鳴き声で親を呼ぶ。」（濱田 2015：39-40）とのことである。なお、鼠は人語をを理する能力があるという俗信がある（本稿２章（３）（ウ）参照）。さらに、鼠は予知能力など特別な能力を持っていると信じられていた（本稿２章（１）（ウ）参照）。

（イ）害悪

①家の鼠（その家の世話になりながら、家に害をなす者。）

②家を破る鼠は家から出る（家や国などを破滅させる者は、外からよりも内から出る。）

③身に虱あり、家に鼠あり、国に賊あり、僧に法あり／家に鼠、国に盗人／国に盗人、家に鼠／家に鼠、国に賊（大小の差はあるが、どんな社会にも害をなす悪者がいる。）

鼠が害悪を与えるという悪いイメージに関しては、「ネズミのイメージが悪いのには根拠がある。ネズミによって感染症が伝播されて人間社会に大きな災害をもたらしてきたからである[7]。（中略）日本人とネズミの歴史を考えれば、近代日本では病原菌を媒介する恐ろしい動物と教えられてきたが、よりさかのぼると、農作物を荒らす憎い動物であった時代のほうがはるかに長い。」（高槻 2018：90-91）とのことである。

ただし、「江戸時代は、キャラクターにしてもペットにしても、現代以上にねずみが親しまれた時代だった。弥兵衛や権守などの御伽草子の主人公。昔ばなしの『鼠の浄土』に出てくる地中の世界にすむねずみたち。室町時代にまでさかのぼる定番の物語だけでなく、人間の生活のさまざまなありさまをねずみたちの姿でにぎやかに描いた絵本が無数につくられるようになった。（中略）なにより、江戸時代は、ねずみの飼育が大流行した。小さなハツカネズミや、ハツカネズミの一種で中国産の南京鼠を品種改良したコマネズミなどが飼育され（後略）」（濱田ほか 2015：80）とのことである。現在でも、「本屋の店頭に並べられているネズミの絵本が、子供たちにネズミについての、可愛いという側面のみが強調された知識を植え込んでいるのではないか（中略）。」「絵本に描かれている彼等の姿は可憐であり、愛らしく、また知恵に富み、勇気がある。「駆除協会[8]」と名乗ってネズミ問題を、彼等を排除するべく活動せねばならぬ委員会としては、この問題は無視出来ない問題ではある。」（長谷川 1996：204-205）とのことである。

一方、鼠は貴ばれる対象ともなっている。「日本では、ネズミは十二支のトップにあるということから貴ばれている。とくに白いネズミは大黒様のお使いとして、吉兆だとされてきた。しかし、黒いネズミは地獄の使いとして忌み嫌われてきた。大黒様はもとは大黒天といい、インド古

[7] 脚注 4 も参照。
[8] 「ねずみ駆除協会」のこと。

来の民間信仰上の神だった。暗黒の神ということだったのだが、仏教に取り入れられて三面六臂の憤怒神として、戦勝守護の神とか、厨房（台所）の神になった。日本には、平安時代の初期に厨房の神として伝えられ、寺院では大黒天を厨房に安置したので、台所の守護神となり、やがて穀物、田んぼの神様ともなった。（中略）日本には大国主命がすでにいて、これと大黒がいっしょになってしまい、ついには七福神のひとつになり、古代インドの憤怒神とはまったく違う福相になった。頭巾をかぶり、小槌をもって、米俵に乗り、足下にネズミを従える姿に変わった（中略）。（中略）ネズミが大黒様の使いだというのは、大黒様が台所の米を害するネズミを支配しているという考えから来たものだ。「古事記」にある神話に「素戔嗚尊（須佐之男命）が、娘の須勢里毘売の大国主命への思慕を絶つために、鏑矢を野に放ち、それを大国主命に拾いに行かせ、周囲から火を放って焼き殺しにかかった。大国主命が逃げ場所がわからないので、うろうろしていると、一匹のネズミが現われて『ここは、中が穴になっています』と言ったので、命がそこをトンと踏むと、穴のなかに落ち、助かった」とあるように、大国主命にまつわるこの神話から、大黒様の足下にネズミの絵が描かれることになった、という考え方もある。」（江口 2003：234-235）とのことである。

（ウ）退治する

①袋の鼠／袋の中の鼠／袋の内の鼠（逃げ出すことができないこと。）

②鍋蓋で鼠を押さえたよう（優柔不断な態度や中途半端な状況に置かれたようす。鼠を余り強く押さえて殺せば蓋が汚れるし、かといってゆるく押さえれば逃がしてしまうということからいう。）

鼠を退治すること（防除）に関しては、「クマネズミの防除が難しい大きな原因は、警戒心の強いことにある。ドブネズミも警戒心は強いがクマネズミの警戒心は飛び抜けて強い。」（矢部 1998：39）、「クマネズミは金網製の罠にはかかるが、内部が見透せない罠（中略）には、なかなかかからない。これはドブネズミと違う点である。よほど慣れない限り、真っ暗な穴には入らないのであろう。」（同：41）、「クマネズミは食べ物を貯めないし、脂を貯める能力も劣るから、中途半端な家ねずみのまねはできない。人間が貯めた食糧を盗む「倉泥棒」（寄食性）に徹することになる。脂を貯めるネズミと違って、彼らは長い距離を移動しない。狭い地域に居を定め、人間の知恵と闘うためには、一段と強い警戒心を備えなければならない。」（同：77-78）とのことである。

ちなみに、鼠は人家に住み食べ物を盗むなどして退治される一方、広く日本各地の俗信では「ネズミの存在はむしろ吉兆と信じられていた」（長谷川 1996：65）、「ネズミが家から姿を消すことは、不幸の前兆と考えられることになる。」（同：67）とのことである。なお、各地の俗信では鼠は火事や天気などの予知能力があると信じられており（長谷川 1996：69-77）、例えば、「ねずみがいなくなった家屋は火事になるという言い伝え」は全国的にある（濱田 2014：38）とのことである。

（エ）天敵としての猫（鼬）

①猫が鼠を捕るようなもの（極めて簡単なこと。）

②猫の鼠を窺うよう／猫の鼠を狙う如し（猫が鼠を狙っているようす。獲物を狙うようす。）

③猫の鼠を捕ったよう（猫が鼠を捕らえたときのように、得意なようす。）

④猫の鼠捕らず／鼠捕らぬ猫／鼠捕らず／鼠捕らずが駆け歩く（猫が鼠を捕らないこと。しなければならないのにしないこと。本分を尽くさないこと。）

⑤鳴かぬ猫は鼠を捕る（口数の少ない者のほうが実行力がある。）

⑥鳴く猫鼠捕らず（口数の多い者に限って実行力がない。）

⑦鼠捕る猫は爪を隠す（優れた才能や力のある者は、普段それをむやみにひけらかさない。）

⑧三年になる鼠を今年生まれの猫子が捕る（すぐれた人物は小さい時から人並みはずれた才能を現す。大人が子供にやりこめられること。）

⑨猫の留守は鼠の代（猫のいないときは鼠の天下。強い者のいないときは弱い者の世の中である。）

⑩鼬の無き間の鼠（恐い者や自分より優れた者がいない所で威張ること。）

鼠と、その天敵である猫とを結び付けたことわざは多い。「ネズミの関係する諺[9]の約三分の一は、宿命的な猫とネズミという二種類の動物の立場、それも猫に対しては絶対的な弱者としてのネズミが描かれたものなのである。」（長谷川 1996：120）とのことである。また、鼠と天敵の猫とを結び付けて、「そもそもわが国に猫が移入されたのも、中国から運ばれた経典をネズミの食害から保護する為に、船に猫を飼った為と言われている。」（長谷川 1996：115）とのことである。

ちなみに、鼠と猫の関係については、猫の尿に対する鼠への影響に関する研究がある。猫の尿の中に含まれる特有の化合物（「felinine」）が妊娠中の鼠（マウス）の流産を引き起こすことや、この化合物の匂いがする場所で飼育された鼠（マウス）は、猫に対して恐怖の反応を示したり猫の尿の匂いを嗅いだときに逃げたりする傾向が少ないということが実験から明らかにされているという[10]。

また、鼬も鼠の天敵である[11]。鼬による鼠駆除に関しては、「農林省（当時）は一九五九年に、栃木県日光市に日光有益獣増殖事業所を設け、八〇年に閉鎖するまでイタチの増殖や導入事業を続けた。（中略）そして、離島を中心に全国四五地点に計一万五千頭以上を放獣したという。その結果、効果の現れなかった事例やイタチが死亡して失敗した事例もあるが、成功して鼠害の減った事例もあった。以上とは別に、戦後一九七二年まで米国の統治下にあった沖純県では、イタチが座間味島（一九五七～五八年）をはじめとしていろいろな島に放された。その数は一九五七年から六八年までの間に六八〇〇頭以上にのぼる。沖縄県は家ねずみ、とくに屋外に住むクマネズミの跳梁が目立った地域であり、サトウキビ畑の鼠害は大きかった。（中略）外来動物の導入によって必ず起こる問題は生態系のかく乱である。（中略）今ではこのような影響に対する反省から、

---

[9] 「筆者が集めたネズミの姿を見せる諺」は合計「一四五句」（長谷川 1996：120）である。

[10] BBC NEWS「Cats ’control mice’ with chemicals in their urine」（https://www.bbc.com/news/science-environment-33380669 2021 年 6 月 6 日最終閲覧）参照。

[11] 猫や鼬のほかに、鼠を捕食する動物は「フクロウ、ノスリ、アオダイショウなど」がいる（矢部 1996:101-102）。

導入された天敵哺乳類の根絶作業が始められた。」（矢部 2008：78-79）とのことである。

（オ）（猫に）狙われる・危険

①猫に鼠／猫に会った鼠／猫に追われた鼠／猫の前の鼠（絶体絶命のようす。危難をのがれることができないようす。）

②猫の鼻先に鼠を置くよう（非常に危険なようす。）

③猫の前の鼠の昼寝（危険が迫っているのに気付かないで油断していること。）

④雀の上の鷹、猫の下の鼠（非常な危険が迫っていて避けがたいこと。また、下位の者に強く上位の者に弱いこと。）

⑤猫の鼻先の物を鼠が狙う／鼠が猫の物を狙う／猫の額の物を鼠の窺う（危険を恐れない大胆不敵な行い。また、到底不可能なこと。）

⑥鷲の巣を鼠が狙う（弱者が、自分の力を顧みないで、強者に立ちむかう。無謀で、身のほどを弁えないこと。）

これらのことわざも、天敵としての猫とともに取り上げられたことわざであるが、特に「危険」に関わることわざとして別立てにしてまとめた。

猫は容易く鼠を退治することができるかというと、必ずしもそうでもないらしい。「ネコにかかればどんなネズミもイチコロか…というと、実際にはそんな簡単なものではないようです。体長一〇センチどまりのアカネズミやハタネズミ、ハツカネズミといった小型の種類のネズミならまだしも、その二倍から三倍近くもの大きさがあるクマネズミやドブネズミなどの比較的大きなネズミになると、さすがのネコといえどもそう簡単に仕留めることができません。特にドブネズミは闘争心旺盛の凶暴なネズミで、しかも非常に鋭いカミソリのような前歯を持っていますから、ネコが安易に襲い掛かって押さえ付けようものなら、前歯でガブリと反撃されかねません。（中略）ネコはよく、獲物を半殺しにして遊ぶようにして狩りをしています。爪を出した前足で何度も何度も執拗に獲物に一撃を加え続け、さらには獲物を掬い上げて空中に放り投げ、落下してきたところをまた前足で掬い上げて空中に放り投げる…という攻撃を繰り返し行うのです。こうした攻撃は、一見残忍な遊びのように見えますが、実際にはこうして短い攻撃を何度も加えることによって、獲物を十分に弱らせてから仕留めようとしているらしいのです。」（佐草 1995：159）とのことである。

（２） 部分的特徴

（ア）尾

①鼠の尾まで錐の鞘（どんな物でも何かの役に立つこと。）

鼠の尾に関しては、「尾は細長く体長と同じくらいあり、毛の少ない鱗状の表面と環状の模様を持つ。この特異な尾はネズミが人びとに嫌われる一因になっている。」（矢部 2008：17）、「ネズミの体の中で、尻尾は特に嫌われる。そこでこれに触れることも何等かの影響があるとされていた

様である[12]。」（長谷川 1996：81）とのことである。

鼠の尾の役割に関しては、「ネズミ亜科の鼠には人家や樹上生活をするものが多い。（中略）電線を渡ったり、鴨居を伝ったり、高い所を行動することが多いというわけで、そんな時に長い尾で体のバランスを取る必要がある。（中略）これらの鼠が木の枝を走ったり柱を駆け登ったりするのを見ていると尾を巧みに操ってバランスをとり、ある時は巻きつけたり、つっかえ棒のようにしたりして体の運動を助けている。」（戸川 1991：162）とのことである。

（３） 行動

（ア）こっそり盗む（引く）

①頭の黒い鼠（物を盗む人。物をかすめ取る鼠に喩えて言う。）
②塩を引く鼠（塩を少しずつ引いてもってゆく鼠。目立たずいつの間にか無くなってしまうこと。）
③鼠が塩を引く／鼠が塩を嘗める（物が目につかないほど少しずつ減っていき、結局なくなってしまう。また、こそこそと小さくなって行う。）
④鼠と木挽きは引かねば食われぬ（鼠が食物を引きずって盗んでいかないと食っていけないように、木挽きも毎日のこぎりをひかなければ生活していけない。）
⑤鼠に引かれそう（家の中に一人きりでいて寂しいようす。）

（イ）齧る・食べる

①倉に住む鼠は米穀を食して楽しみ、厠に住む鼠は糞土を食して楽しむ（それぞれ分に応じた楽しみ方がある。また、環境によって心持ちに高下が生じる。）
②雪隠の鼠は一生糞を食いて命を保つ（どんなに卑しいことをしても生きてゆけないことはない。）
③月の鼠／月日の鼠（月日の過ぎゆくこと。）

鼠が齧ることに関しては、「ネズミといえば、物をかじるときの「カリカリ」という音を連想するが、その音の回数は一秒間あたり最高六回、平均一・五回ほどといわれる。かじるという行動はネズミの特徴を最もよく表す言葉であり、これこそ齧歯目と呼ばれる理由でもある。」（矢部 2008：20）とのことである。

鼠の歯に関しては、「齧歯目は犬歯を持たない（中略）。門歯（切歯）と臼歯だけを持ち、門歯は上顎と下顎に一対、計二対（四本）ある。」（矢部 2008：17）とのことである。さらに、「優れたかじる能力の秘けつは、門歯の硬さと鋭さと一生伸び続ける構造であり、そして門歯が挿入されているしっかりした顎骨構造である。ネズミの頭部を解剖すると、たいへん大きくて厚い咬筋が目に付くが、この咬筋の造りも強いかじる力の根元である。ドブネズミの場合、かじる圧力は一平方センチメートルあたり五〇〇キログラムであり（中略）。門歯は一生伸び続け、ドブネズミでは一週間に上顎門歯が二・一ミリメートル、下顎門歯はこれより速く二・八ミリメートルの速さ

[12] 俗信では、ネズミの尻尾を摑むと「ネズミが増える（広島県・鳥取県）」、ネズミの尻尾を踏むと「ネズミの仲間が多くなる（鳥取県）」、ネズミの尾を切って持つと「ネズミが増える（兵庫県）」などと言われている（長谷川 1996：81）。

で伸びる。一ヵ月に一センチメートルほど伸びる計算だ。そのために、常に摩耗させないと上顎の門歯は渦巻き状に伸び、下顎の門歯は象の牙のように伸びて、かみ合わなくなる（中略）。門歯の前面は黄褐色の硬いエナメル質でできており、内側はやや軟らかな象牙質でできているので、内側の象牙質は前面のエナメル質よりも速くすり減るし、エナメル質が象牙質を削り取る働きもする。その結果、門歯はいつも鋭く保たれることになる。鉱物の硬さを、方解石（三）、ホタル石（四）、リン灰石（五）、正長石（六）、水晶（七）などとしたとき、ネズミの門歯の硬さは五・五であるが、実際には三・五以下のものをかじる。鉄は四、アルミは二・七五、銅は二・五、鉛は一・五の硬さを持つ。したがって、鉄製品はかじられないが、鉛はもちろんのこと、アルミや銅製品もかじられてしまう。コンクリートはネズミにかじられない硬さを持つと思うが、ひび割れなどができればかじり取られてしまうのかもしれない。」（矢部 2008：20-22）とのことである。

鼠の食べ物に関しては、「ネズミは、草や木の芽や根、木の実や果実などのほか、鳥のヒナや卵、昆虫をはじめ人の食べ残した残飯など、何でも食べる広い食性をもっている。」（佐草 1995：158）とのことである。特に、クマネズミは「植物性の食べ物、とくに種子・穀類や果実を好む。」（矢部 2008：25）、ドブネズミは「雑食性で、魚介類や肉類など、高タンパクの食べ物を好む。屋外ではナメクジ、ミミズ、昆虫、海浜動物、雑草などの野生動植物も食べている。」（同：28）、ハツカネズミは「種子・穀類やその製品を好んで食べる。」（同：29）とのことである。

ちなみに、鼠は食用にもされることがある。「南米ではモルモットが飼育され、品種改良もされているようだ。体長は 30 センチほど、体重も 1.5 キロほどあり、ウサギをひと回り小さくしたくらいである。ただ飼育の目的はペットという面もないわけではないが、おもには食用であるらしい。」（高槻 2018：86）、「東南アジアや南アジアで耕作地を荒らすのは、日本と違って、大きいネズミが主役である。その多くは、クマネズミやオニネズミの仲間で、国によっては食用にされる。」（矢部 1998：62）、「台湾には甘蔗畑に棲息するオニネズミという大型の鼠がいるが、これの丸焼きや干物がかなり売れているというし、フィリピンには鼠の缶詰が売られており、鼠のカレーライスもなかなかいけるという話である。」（戸川 1991：191）とのことである。なお、日本の俗信では、「ネズミを食うなどということはとんでもない結果を招く。　ネズミを食うと、一生貧乏する（鳥取県・広島県）　七代貧乏する（鳥取県）　出世しない（アイヌ）　と言われているらしい」（長谷川 1996：82）とのことである。

「月の鼠／月日の鼠」は、「『賓頭盧（びんずる）為王説法経』に説く、無常の喩え」[13]であり、「王からの酔象の追跡を逃れようとしていた旅人が、古井戸に落ち込んだ。しかしそこに生えていた草にぶら下がって危うく命を助かる。しかし底を見ると大蛇が彼を狙っている。そしてやっと彼の命を支えている草の根元を、黒と白の二匹のネズミが、代わる代わる齧っている。しかしそんな危険な状況にあって、彼は滴り落ちてきた蜜を口にして、満足しているのである。ここで王とは自分の悪業、酔象とは無常の使者、古井戸は悪道、草は命の根、蜜は果てない満足、そして問題の二匹のネズミは時の流れを示し、黒白は昼夜を意味すると説明される。つまり我々人間

[13] 『例文　仏教語大辞典』（ジャパンナレッジ版）「日月の鼠」の項目。

は絶えず命を縮めている時の流れの中で、辛うじて支えられている状況に気付かず、刹那の喜びに身を委ねている存在であると教えているのである。」（長谷川 1996：54-55）とのことである。

（ウ）笑う

①明日の事を言えば天井で鼠が笑う（世の中のことは、前もってはかり知ることができない。）
②済んだ事を言うと鼠が笑う（済んでしまったことをあれこれ言ってもどうしようもない。）
③問屋のせっかち鼠が笑う（日ごろ悠長に構えている人が急に気ぜわしくする。）

鼠が人語を解し笑うことに関しては、「日本語に於いて「ネズミ」という正式の名前を与えられているに拘らず、彼らはしばしば別の呼び名で呼ばれることがある。（中略）こうした別称が生まれた背景には、一般にネズミは人語を理解する能力を備えていて、直接的にネズミと呼び捨てにしたりすると、とんでもない仕返しをされたり、ネズミ捕りを仕掛ける時などには、彼らが用心して効果が挙がらないからだと信じられているという考え方が根強い。」（長谷川 1996：13）とのことである。

（エ）その他

①鼠の嫁入り／鼠の婿取り（あれこれと選んでみても、結局変わりばえのしないところに落ち着くこと。）
②瓶に落ちた鼠の如し（逃れ出ることのできないようす。）
③鼠の空死に（鼠が死んだまねをして逃げる機会をうかがうこと。）
④急ぐ鼠は穴に迷う／急ぐ鼠は雨に会う（慌てると失敗する。）

「鼠の嫁入り／鼠の婿取り」は、「ねずみの嫁入り」という昔話に基づいている。ただし、「「ねずみの嫁入り」は日本の昔話とも、外国の昔話とも言うことはできない。」ようである[14]。「あらすじは、鼠の両親が、娘を世界一偉い人に嫁がせようとして、太陽に娘をめとってくれるよう頼むと、太陽は私をさえぎる雲の方が偉い、と断る。[15]風は私をさえぎる壁の方が偉いと言い、壁は私をかじる鼠の方が偉い、と次々に断る。結局、鼠の娘は鼠に嫁入りすることになる、という話。（中略）この昔話は、日本全土に普及していて、より偉いものを捜し求めて次々にモチーフを重ねていく累積譚は、AT[16]2031「いっそう強いものと一番強いもの」として世界的にも広く分布しており、アジアの諸民族でも伝承されている。最古の古典資料とされるインドの『パンチャタントラ』やラ・フォンテーヌの『寓話』などはヨーロッパ語族系の伝承に受け継がれる。また、日本では、『沙石集』にある類話でも、鼠の両親が娘鼠の婿を捜す話となっていること等が資料 3[17]に書

[14] 「「ねずみの嫁入り」は日本の昔話か外国の昔話か。」((Last update)2021 年 02 月 25 日)「レファレンス協同データベース」(https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000065592)（2021 年 6 月 5 日最終閲覧）より。
[15] 「雲は私を吹き飛ばす風の方が偉い、と断る。」という内容がここに入るべきである
[16] 「「AT」とは、アールネ氏とトンプソン氏が、世界各地に伝わる昔話を収集・分類した類型のことである。」（出典は脚注 14 に同じ。）
[17] 「【資料 3】　日本昔話ハンドブック / 稲田浩二∥編 / 三省堂 , 2001.7　＜RK/388.1/5073/2001＞」（出典は脚注 14 に同じ。）

かれている。（中略）「鼠の婿選び」と共通する話は、アイヌ族、朝鮮、中国カワ族、モンゴル-モンゴル族、インドネシア、ベトナム、ラオス、インド-パンジャブ、アフガニスタン、コーカシア、シベリア-ヴォグール族、シベリア-ブリヤト族、シベリア-サモエード語族、アラスカ-イヌイットなどで伝承されている。また、日本の書物としては、『沙石集』のほか『一休諸国物語』に載っている。」[18]とのことである。

３　終わりに

鼠は日本人にとって極めて身近な動物である。穀物などを盗み荒らす憎むべき動物である一方で、貴ばれ親しまれる存在でもあり、さまざまな形で人間と関わりを持ってきた。そうした鼠の特徴的な性質や行動などがことわざに描き出されている。

鼠は世界中にいる。『世界ことわざ大事典』（柴田ほか（編）1995）によると、さまざまな言語や文化圏に鼠に関することわざがある。この大事典の巻末の「索引」には「キーワード索引」があり、鼠と猫の語がともに含まれる「ネコ／ネズミ、猫／鼠」の項には 34 句、鼠の語のみが含まれる「ネズミ、鼠」の項には 18 句がそれぞれ挙げられている。日本のことわざと同じく、鼠と猫を組み合わせたことわざが多い。日本のことわざと捉え方が共通しているものも多く、例えば「猫の留守は鼠の代」に相当することわざは、「猫がいない時は鼠が王になる」（カンボジア）、「ネコが寝ているすきに、ネズミが走りまわる」（エストニア）、「猫が留守すると、鼠が躍る」（イタリア）など世界各地にある。一方、「仏門に入った猫でも鼠はつかまえる（表向きは立派なことをするが、裏で悪いことをする）」（スリランカ）、「寝そべる猫の口に鼠は入らず（努力をせずには何も得られない）」（フィンランド）、「手袋をした猫は鼠をとらない（いつもの習慣と違ったことをするといつもの器用さは見せられない）」（コロンビア）など日本のことわざには見られないものも多い。鼠のみを取り上げたことわざについても、「象の頭にネズミのしっぽ（初めは象の頭のように大きくて豪快なことが、終わりはネズミのしっぽのように小さくお粗末になること）」（ラオス）、「墓がねずみを生んだ（大騒ぎした割にはたいした結果にならない）」（ウクライナ）のように、日本のことわざと同様に、鼠を卑小で取るに足らないものに喩えることわざがある。一方、「鼠が米を食べ、蛙がぶたれる（罪を犯した者が罰を免れ、別の人間が代わりに罰を受ける）」（ネパール）などのような独自の捉え方（ネパールでは鼠は蛙よりすばしこく賢いと思われている）をしたことわざも多い。

以上、本稿では、「鼠」に関することわざを示しながら、「鼠」に対する見方や捉え方の特徴を見た。

参考文献

石島芳郎（2006）『十二支の動物たち』東京農業大学出版会

江口保暢（2003）『動物と人間の歴史』築地書館

[18] 脚注 14 に同じ。

遠藤秀紀（2000）「第 2 部　ネズミ」川内博、遠藤秀紀『カラスとネズミ　ヒトと動物の知恵比べ』岩波書店

金子之史（1994）「ネズミ目ネズミ科」阿部永（監修）『日本の哺乳類』東海大学出版会、pp. 90-109

北村孝一(編)（2012）『故事俗信ことわざ大辞典　第二版』小学館

佐草一優（1995）『ウソ・ホント？　動物ことわざ事典』ビジネス社

柴田武、谷川俊太郎、矢川澄子(編)（1995）『世界ことわざ大事典』大修館書店

高槻成紀（2018）『人間の偏見　動物の言い分　動物の「イメージ」を科学する』イースト・プレス

戸川幸夫（1991）『イヌ・ネコ・ネズミ　彼らはヒトとどう暮してきたか』中央公論社

西岡佑一郎（2016）「第 2 章　日本のネズミ化石　第四紀齧歯類の古生物学的研究」本川雅治(編)『日本のネズミ　多様性と進化』東京大学出版会、pp. 44-64

長谷川恩（1996）『ネズミと日本人』三一書房

馬場俊臣（2010）～（2020）「「牛」に関することわざ」「「虎」に関することわざ類」「「兎」に関することわざ」「「龍」に関することわざ」「「蛇」に関することわざ」「「馬」に関することわざ」「「羊」に関することわざ」「「猿」に関することわざ」「「鶏」に関することわざ」「「犬」に関することわざ（１）」「「犬」に関することわざ（２）」『札幌国語研究』15～25、北海道教育大学国語国文学会・札幌

馬場俊臣（2021）（刊行予定）「「猪」「豚」に関することわざ」『札幌国語研究』26、北海道教育大学国語国文学会・札幌

濱田陽（2015）「日本十二支考〈猪〉〈鼠〉〈牛〉」『帝京大学文學部紀要　日本文化学』(46)、帝京大学文学部日本文化学科、pp. 1-69

濱田陽、李珣淑（2015）「日本十二支考〈猪〉〈鼠〉〈牛〉現代文化篇」『帝京大学文學部紀要　日本文化学』(46)、帝京大学文学部日本文化学科、pp. 71-95

本川雅治（2016）「序章　日本のネズミ　種多様性と研究史」本川雅治(編)『日本のネズミ　多様性と進化』東京大学出版会、pp. 1-22

矢部辰男（1996）「ドブネズミ・クマネズミ・ハツカネズミ」川道武男(編)『日本動物大百科　第 1 巻　哺乳類Ⅰ』平凡社、pp. 100-102

矢部辰男（1998）『ネズミに襲われる都市　都会に居座る田舎のネズミ』中央公論社

矢部辰男（2008）『これだけは知っておきたい　日本の家ねずみ問題』地人書館

吉田光由(著)、大矢真一(校注)（1977）『塵劫記』岩波書店

『日本大百科全書（ニッポニカ)』(ジャパンナレッジ版)「ネズミ」の項目